

今は只夢の如くそ思ほゆるたのしかりしもうれしかりしも
ねても憂しさめてもつらし我を撫て我をいたはる人しなければ

なつくゝ

文 二 夢

四

郎

寂しみの音や立つらん青白く月に照り出でし貝殻の道
吾と吾が臚の影を踏みて行く更けにし月のうすらあかりに
近づかば吾が幻は破れなん遠く離れて獨り忍ばん
眞暗な心の囚獄遁れんとたゞわけもなく郷里を出でたり
一本の残りし煙草味ひぬ淋しさに堪へで旅の男は
たまさかに街に出づれば仄暗く夜店ならびて耐へ難き哉
なにげなく見上げし眼に大西郷そゝりて立てり眞晝の上野
今や去る双の眼にいたましく都の臺そゝり立つかな
悲しきは列車につきし煤煙を洗ひ落して日を送る人
硝子窓にそつと息吹きて思ひ出の小さき印象しるして見たり